



## 青い目の人形「クリッシー」

▶青い目の人形クリッシー



隆郷リウキョウ小学校の玄関には青い目の人形が飾られています。今から八十年前、日米関係を改善しようと贈られた人形の交流についてご紹介します。

### ◇日米交流の使者として

第一次世界大戦後の一九一四年、国際協調や軍縮論の進む一方で世界的な経済不況が深まるさなか、米国内でも不況を反映して失業者が増加し、日本人移民に対する排斥運動はいせきが問題になっていました。世界児童親善協会事務局長のシドニー・ギューリックはこれを憂い、日米協会会長で日本経済会の重鎮渋沢栄一に両国の親善のための人形受入れを要請したのが人形の交流の発端となりました。

米国側では国際児童親善会やキリ

スト教団体が主導し、約一万二千体の青い目の人形が用意されました。

子どもたち主体の国際交流を目指すため、人形の名づけや人形用旅券の手配、輸送費用の捻出、送別会の差配等を米国の子どもたちに任せ、日本の雛祭りの時期に合わせて贈るようにするなど、異文化理解にも気を配りました。

米国から人形が東京に到着したのは昭和二年二月、三月三日には日本青年館で歓迎行事が行われ、その後各都道府県の小学校と幼稚園に配布されました。

ギューリックが人形とともに贈った手紙には、雛祭りのような美しい風習をはじめとする日本文化への憧れにも似た感情が垣間見えます。そして親日家らしく、人形に対するお礼は不要であること、できれば感謝の意を手紙で表してほしいことなどが記されています。

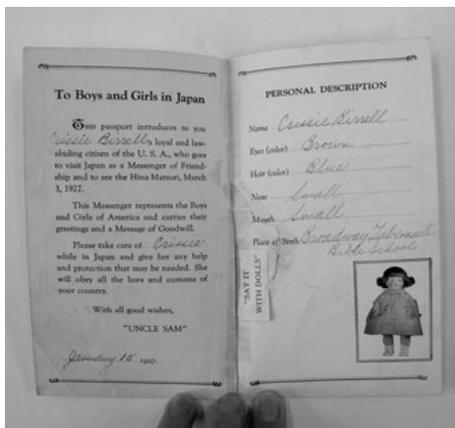
青い目の人形は、当時アメリカで

大量生産されていたコンポジション\*製で手足が自由に動き、寝かせるとまばたきをして「ママー」と声を出す仕掛けがありました。これは当時の日本の子どもたちにとって驚異だったようです。

同年日本からは答礼として五十八体の市松人形が米国へ贈られました。クリスマスに合うようにと、東京・京都の人形職人には急ピッチでの準備が依頼されたそうです。

### ◇ニューヨークから隆郷へ

こうして隆郷小学校に「クリッシー」がやってきました。昭和二年九月一日のことです。彼女は前述のギューリック氏の手紙とともにパスポートを持参しており、ニューヨーク市ブロードウェイの出身であると記されています。当時の資料は残っていませんが、盛大な歓迎会が開かれたことでしょう。当初は、一年生



▶クリッシーのパスポート

の教室に箱に入った状態で置かれ、大切にされてきました。しかし第二次世界大戦の勃発、太平洋戦争開戦へと向かう中で、仲間の多くは敵国の人形として破壊され、廃棄されていきました。

クリッシーはこの受難の時代を奇跡的に生き延びることができました。茨城県には当初二百四十三体の人形が贈られましたが、現在はクリッシーを含めた九体しか確認されていません。物置の隅にしまわれていた、とか近所の人が家にかくまっていた、などと言われており真相は定かではありません。少なくとも昭和三十年年代半ばには小学校の教室に戻されていたようです。その後再び片付けられたかして人目に付かなかった時期があり、クリッシーを知らない世代の卒業生もいます。

隆郷小学校は昭和四十六年に新築されており、荷物の移動や廃棄の混乱の中でクリッシーの行方も忘れられていつてしまったようです。その後、昭和四十八年頃のテレビ番組で青い目の人形の特集をしたことがきっかけで、児童に「発見」されることとなりました。

クリッシーは応接室や玄関のマスコットとなり、来日から八十年を迎えた現在も子どもたちを見守っています。

※樹脂とおがくずなどを混ぜ型抜きしたもの。  
(歴史民俗資料館)